

# 教育だより

## 特別号 (2024 年度教育協カウィーク)

### Dec 2024

目次

(全体) 教育 協カウィーク 2024 開催概要	<a href="#">2</a>
(全体) 教育協カウィーク オープニングセッション	<a href="#">2</a>
日本とアフリカの大学間における国際頭脳循環の促進に向けて	<a href="#">3</a>
「気候変動+防災」に対して教育協カで何が出来るか?	<a href="#">4</a>
「JICA “みんなの学校” プロジェクト ～ 学校と地域の協働で応援する子どもの学び ～」	<a href="#">5</a>
『地球規模課題対応国際科学技術協カプログラム (SATREPS) 』～事業形成・実施中の課題および終了後の展望～	<a href="#">6</a>
国際教育協カキャリアの形成における理論と実践の往還～ザンビア特別教育プログラムの事例から～	<a href="#">7</a>
高等教育におけるジェンダー主流化の推進に向けて –STEM 教育への女性参加のための方策	<a href="#">8</a>
「子どもの学びにつながる理科教育とは何か」 ～教科書開発から考えるこれからの初等理科教育協カの可能性～	<a href="#">9</a>
国際教育協カ共創セッション～ご関心の国や課題別で情報交換・ディスカッション・ネットワーキングをしませんか～	<a href="#">9</a>
「教育×無償資金協カ」の未来	<a href="#">10</a>
教育協カの障害主流化の今後に向けて –日本の学校現場を踏まえた実践–	<a href="#">11</a>
「日本と世界のこどもたちが、つながり、共創する未来」	<a href="#">12</a>
難民・避難民の背景を持つ人々と共に～シリア・アフガニスタン留学事業等から見る現状～	<a href="#">13</a>
JICA 算数 KMN プレゼンツ テストの開発の第一人者に迫る：テスト理論の概要と活用～JICA 算数学習到達度評価 (J-MAGPA) の実践を通して～	<a href="#">14</a>
危機下の教育支援のためにどのようなアドボカシー活動を進めるべきか～ロヒンギャ難民キャンプの教育を事例に～	<a href="#">15</a>
ECD 分野における保護者との協働の可能性	<a href="#">16</a>
JICA Mathematics KMN Presents : What is Singapore Math Approach?	<a href="#">16</a>
途上国留学 PR・経験者体験談セッション「世界に向けた、「わたし」の第一歩 –途上国留学から広がる未来への可能性–」	<a href="#">17</a>
JICA 算数 KMN プレゼンツ JICA がどうして算数アプリ? ～途上国の四則計算力向上を目指して～	<a href="#">18</a>
海外から学ぶこれからの教育 2024 年度 教師海外研修 教育行政コース報告会	<a href="#">19</a>
外国につながる子どもと教育—日本での実践と途上国での教育支援から学ぶ	<a href="#">20</a>
「誰も取り残さない教育」をどう実現するか? ～NGO ならではの現場アプローチと広がる仕組みづくり～	<a href="#">21</a>
教育で社会は変革できるか? SDG4「誰ひとり取り残さない」教育協カのマネジメントと評価	<a href="#">22</a>
経験者から学ぶ、途上国における ICT 導入の障壁とそれを乗り越える知恵と工夫	<a href="#">23</a>
JNNE/ACCU/SVA 共催 国際識字デー記念イベント:紛争・災害の影響を受けたコミュニティにおける識字・ノンフォーマル教育支援	<a href="#">24</a>
教育協カキャリアセミナー	<a href="#">25</a>
クロージングセッション	<a href="#">26</a>

2024年9月2日～13日にかけて、教育協力について考えるイベント「教育協力ウィーク 2024」を開催しました。これは、よりよい教育協力に向けて様々なアクターの知見共有・共創のための意見交換を行うことを目的に、国際教育協力に携わる開発コンサルタント、教育協力 NGO ネットワーク（JNNE）、国際協力機構（JICA）の主催で行ったものです。今年で4回目を迎えますが、6,941名の参加登録、2,793名（いずれも延べ）の参加を得ました。

教育協力ウィークは、教育協力プラットフォーム\*の活動の一環として毎年開催していますが、関係者の皆様からの自主的な発信・共創の場とすることを狙いとして、企画提案を募集した結果、合計28セッションを実施しました。これに伴い期間を2週間に拡大し、参加頂きやすいように、夕方から夜の時間帯にかけて開催しました。

セッションは、豊富な事例紹介、協力現場から得られた知見とアカデミックな視点の議論、新機軸の取り組み、民間企業との共創、教育協力のキャリアパス、そして国際頭脳循環・途上国への留学・子どもどうしの学び合いなどの日本と途上国とのつながりなど、幅広く密度の濃いセッションとなりました。本特別号にて、各セッションの概要を掲載しておりますので、皆さまぜひご覧ください。

改めまして、本イベントにご参加いただいた皆様、企画・登壇いただいた皆様に御礼申し上げます。来年度の開催に向けた準備も始まりましたところ、引き続き本イベントにご関心をお寄せいただけますと幸いです。

\*教育協力プラットフォーム：開発コンサルタント、NGO/NPO、研究者、民間企業、JICA等、国際教育協力に携わるアクターのプラットフォームです。「教育協力の知見共有の場」「連携事業を生み出す場」「人材育成・発掘・活躍の場」「発信・広報の場」という4つの機能を持っています。

【教育協力ウィーク 2024 スケジュール】

人間開発部 基礎教育第一チーム 深澤 智子

9月2日（月）、2週間にわたる教育協力ウィークの幕開けとして、大学有識者、NGO、開発コンサルタント、民間企業、JICAなど多様なアクターが登壇するオープニングセッションを実施しました。

JICA 井本理事の開会あいさつに続き、広島大学吉田和浩教授より、SDGs達成に向けた教育協力の国際的潮流と協力現場とのギャップについて基調講演を行いました。その後、各アクターを代表するパネリスト（森氏、星氏、武藤氏、亀井氏）がそれぞれの取り組みに関して発表しました。その後、「成果主義の潮流における日本の教育協力」というテーマでパネルディスカッションが行われ、成果をどのように捉えるか、成果最大化のために、多様な関係者がどう共創できるのか、その成果をどのように発信し、また国内に還元していけるのか等について、様々な意見が出されました。

議論の中では、着実な成果の発現に向けて、各アクターが有するそれぞれの強みや過去の経験を持ちより、自由闊達に議論しながら共創・革新を生み出していく「場」の重要性が強調されました。教育協力プラットフォームは、まさにそうした「場」となり得るものであり、今後も本活動を盛り上げていきたいと思います。

#### <登壇者（順不同）>

井本 佐智子（JICA 理事）

吉田 和浩（広島大学 IDEC 国際連携機構 教育開発国際協力研究センター長・教授）

星 登（カシオ計算機株式会社 学販企画担当室長）

武藤 小枝里（インテムコンサルティング株式会社 社会開発部次長／業務主任）

森 透（教育協力 NGO ネットワーク（JNNE）代表）

亀井 温子（JICA 人間開発部長）



GAKUHAN 活動（関数電卓を活用した教育支援）  
における、タイでのパイロット授業（カシオ計算機）



JICA が開発支援に携わった、パプアニューギニア  
初の国定教科書で学ぶ子どもたち



JNNE による「SDG4 教育キャンペーン」をラオスのイベントで展開



ウガンダの産業人材育成支援プロジェクトにて、ナカワ職業訓練校の先生が自分たちで組み立てた実習機材の前で（インテムコンサルティング株式会社）

人間開発部 基礎教育第一チーム 深澤 智子



## 教育協カウィーク

## 日本とアフリカの大学間における国際頭脳循環の促進に向けて

本セッションでは日本とアフリカの大学間における国際頭脳循環の促進に向けて、これまでの日本の支援アセットや関係機関との共創を通じた日本・アフリカ間の互恵的な国際頭脳循環の促進・面的波及に向けた現状・課題や方策等について議論しました。

各登壇者の発表では、アフリカのパートナー大学（エジプト日本科学技術大学（E-JUST）、ジョモ・ケニヤッタ農工大学（JKUAT））との国際共同研究事例や大学間交流事業にかかる連携事例が紹介され、日本とアフリカの国際頭脳循環促進にあたり活用可能なプログラムについてご説明いただきました。また、パネルディスカッションでは、アフリカの多様性、地域レベルの結びつきに留意しつつ、日本の大学が組織として「意識的」にアフリカを知り、パートナーシップを強化していく点の重要性についても触れられ、

日本とアフリカの国際頭脳の促進にあたっては、アフリカ域内の拠点大学を通じてオールジャパンで面的波及に取り組んでいくことが共有されました。

本セッションでの議論や知見の共有を来年に控える TICAD9 に向けて活かしていきたいと思います。

#### <登壇者>

山本 光夫（東京大学大学院 農学生命科学研究科 教授）

三原 真智人（東京農業大学 教授/グローバル連携センター長）

米澤 彰純（東北大学 国際戦略室副室長・教授、総長特別補佐（国際戦略担当））

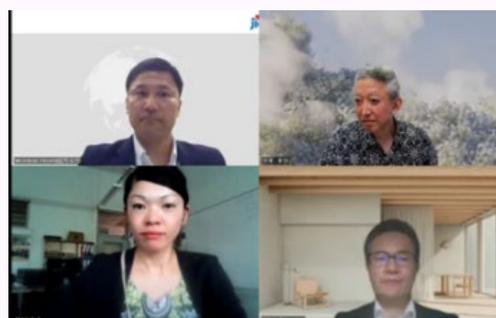
藤井 浩人（国立研究開発法人科学技術振興機構（JST） 調査役）

十田 麻衣（アフリカ型イノベーション振興・JKUAT/PAU/AU ネットワークプロジェクト（フェーズ2） JICA 専門家（業務調整/高等教育機関ネットワーク形成））

望月 裕司（JICA 人間開発部高等教育・技術教育チーム 企画役）



パネルディスカッションの様子



（右上から時計回りに）ご登壇くださった米澤様、山本様、十田様  
人間開発部 高等・技術教育チーム 望月 裕司

## 教育協カウーク

## 「気候変動+防災」に対して教育協力で何が出来るか？

本セッションでは、気候変動・防災における教育の役割について、日本国内、開発途上国、国際機関における取り組み事例の紹介や、国際協力や開発途上国における防災教育の在り方について議論を行いました。

登壇者からは、個人の自然災害への意識を高めるために、行動変容を促す防災教育の普及が必要であることが強調され、また子供たちが主体的に防災活動に参加する環境作りが重要であることが述べられました。また、国際機関における防災教育の枠組みや潮流のほか、途上国における防災教育協力の可能性についていくつかのアイデアも示されました。さらに、メディアの中でも特に、地域メディアの活用が人々の防災意識の向上に寄与した事例などが紹介されました。全体を通じて、国内外で防災教育における学び合いを促進するためには、地域住民と教育機関の連携や国際的なネットワークの構築が不可欠であることが強調されました。

#### <登壇者>

ショウ ラジブ（慶応義塾大学 SFC 政策・メディア研究科 教授）

スバンドリニ カクチ（認定 NPO 法人 SEEDS Asia 理事）

安川 総一郎（UNESCO 自然科学局 防災課長）

及川 幸彦（奈良教育大学 ESD/SDGs センター 副センター長（准教授））

相馬 敬（株式会社パデコ 取締役/常務執行役員）



3名の登壇者（左からカクチ氏、ラジブ氏、相馬氏）



2名の登壇者（右上：安川氏、下：及川氏）

株式会社パデコ 鈴木 加奈子

## 教育協力ウィーク

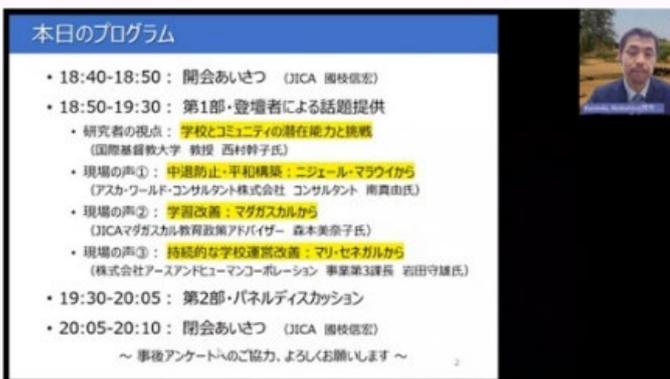
# 「JICA “みんなの学校” プロジェクト ～ 学校と地域の協働で応援する子どもの学び ～

JICA では「学びの改善」を目的に、コミュニティ協働型である「みんなの学校」プロジェクトを展開してきました。

本セッションでは、同プロジェクトで重要な役割を果たすコミュニティの潜在能力と課題について、実際にプロジェクトを実践している専門家の経験と、教育開発の研究者による学術的な視点を交え、議論しました。「学力向上など目に見えない課題にいかにか気付かせるか」や、「コミュニティ内の分断を防ぐにはどうすればよいか」などの課題に対し、マダガスカルでの寸劇を用いた研修の事例など、多様な取り組みが紹介されました。そして、コミュニティ協働の秘めている住民の主体性に基づく持続性と、教育にとどまらず、様々な問題を解決する潜在能力が強調されました。同時にコミュニティというアクターにすべてを委ねるのではなく、行政や国際機関などの多様なアクターには何かできるのかを考える機会にもなりました。

### <登壇者>

- 西村 幹子（国際基督教大学 教授）
- 南 真由（アスカ・ワールド・コンサルタント株式会社 コンサルタント）
- 森本 美奈子（JICA マダガスカル教育政策アドバイザー 専門家）
- 岩田 守雄（株式会社アースアンドヒューマンコーポレーション 事業第3課長）
- 國枝 信宏（JICA 国際協力専門員（基礎教育））



盛りだくさんのプログラム



（左上より時計回りに）西村様、岩田様、國枝様、森本様、南様、ご登壇くださった皆様、ありがとうございました！



ニジェール\_「みんなの自分事」を引き出す住民集会



マダガスカル\_習熟度に応じて楽しく学ぶ TaRL 手法



マラウイ\_中退防止のための家庭訪問



マリ\_コミュニティが支える放課後学習

人間開発部 基礎教育第一チーム インターン 筑本 普



## 教育協カウィーク

# 『地球規模課題対応国際科学技術協カプログラム (SATREPS)』～事業形成・実施中の課題および終了後の展望～

本セッションでは SATREPS 事業概要、形成、実施にあたっての課題や終了後の展望等について学び、事業活用に向けて知見を深めることを目的に実施しました。

SATREPS 担当者、元研究代表者にご登壇いただき、具体的な事例を用いて円滑な事業実施のために重要な内外コミュニケーション、技術協カプロジェクトとの連携に対する期待と可能性などについてご説明いただきました。また、パネルディスカッションでは、SATREPS 申請を検討する研究者に対するアドバイスとして国際的な意識を持つことの重要性、出口戦略の一つとして産学連携に繋げていくための重要な点として、民間と連携しビジネスに繋げていくスキームの作り上げについても触れられました。

専門家勉強会は隔月を目安に開催していますので、今後も SATREPS の活用について意見交換を継続していきたいと考えています。

### <登壇者>

安藤 亥二郎 (JICA ガバナンス・平和構築部 STI・DX 室特別嘱託)

吉岡 佐知子 (エジプト・日本科学技術大学 (E-JUST) プロジェクト 業務調整/国際ビジネス人文学部・リベラルアーツ・カルチャーセンター)

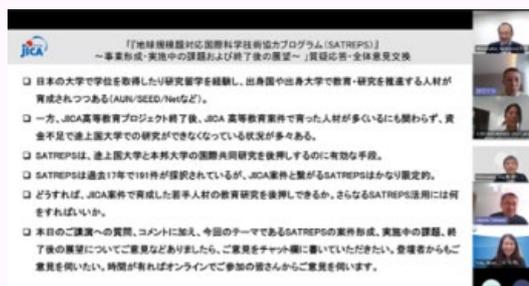
吉村 千洋（東京工業大学 環境・社会理工学院 土木・環境工学系、水環境研究室 教授、博士（工学））

渡邊 公一郎（JICA 国際協力専門員）

岡野 貴誠（エジプト・日本科学技術大学（E-JUST）プロジェクト チーフアドバイザー）



プレゼンテーションの様子



パネルディスカッションの様子

人間開発部 高等・技術教育チーム 江田 育慧

## 教育協カウィーク

## 国際教育協カキャリアの形成における理論と実践の往還

### ～ザンビア特別教育プログラムの事例から～

#### 【セッション概要】

国際教育協カの各分野で活躍する登壇者から、これまでどのように理論と実践を往還し、どのような想いでキャリアを選択してきたかについて紹介がありました。

登壇者であるザンビア特別教育プログラム(※)の修了生は、国際協カ実践者、学校教員、研究者、民間就職といった多様なキャリアパスを歩んでおり、理論と実践の往還により、キャリア形成や専門性の深まり・広がりにつながっている事例も紹介されました。

※JICA と広島大学の連携のもと、ザンビアでの JICA 海外協カ隊としての活動(実践)と、大学院での教育・研究(理論)を組み合わせたプログラム

#### 【パネルディスカッション】

協カ隊参加のタイミングに関する質問には、個人のライフステージも重要であり、実務経験・フレッシュな視点ともに活かせるという回答がありました。

また、将来国際教育協カに携わりたいという方には、参加前は不安があったが先輩方の助言があり事前準備できたという経験談や、力強い励ましの声がありました。

#### 【参考資料】[広島大学・JICA\(2022\)「ザンビア特別教育プログラムの成果と今後の可能性」](#)

#### <登壇者>

清水 欽也（広島大学 教授）

馬場 卓也（広島大学 教授）

島本 史也（市立札幌開成中等教育学校 教員）

小林 恭子（アイ・シー・ネット株式会社 国際開発コンサルタント）

土田 希（キヤノンメディカルシステムズ株式会社 調達センター グローバル調達部）

松原 憲治（国立教育政策研究所 教育課程研究センター・基礎研究部 総括研究官）

南川 真海子（JICA 青年海外協カ隊事務局 社会還元促進課 課長補佐）



登壇者・オンサイト参加者の方々と

広島大学大学院人間社会科学研究科国際教育開発プログラム 池田 亜美

## 教育協カウィーク

## 高等教育におけるジェンダー主流化の推進に向けて - STEM 教育への女性参加のための方策

本セッションでは高等教育 STEM 分野においてジェンダー主流化を進める必要性について共通理解を図り、ジェンダー主流化への取組みと課題について JICA、開発コンサルタント、本邦大学が事例を共有し有効な取組みについて議論しました。

今後への示唆・学びは以下のとおりです。

- 本分野では顕著なジェンダー格差が見られ、個人の尊厳に加え経済成長のためにもジェンダー主流化が必要。背景には複雑な要因があり丁寧な分析が必要。
- 取組みを進める体制作りには意識啓発が重要。ジェンダー案件でなくても女性の巻き込み等の働きかけは可能。
- プロジェクト計画時からジェンダー視点を取り入れることで相手国政府と共に取組みをフォローできる。
- ジェンダー主流化では日本に優位性があるとは言えないが、学ぶ姿勢でカウンターパートの方々と協働できるのが日本の強み。
- 補助事業後も活動を継続させるには補助事業での集中的な取組みと自発的な取組みへの支援の両方が必要。

本セッションで得られた学びと繋がりを実務に活かしジェンダー主流化に取り組んでいければと思います。

### <登壇者>

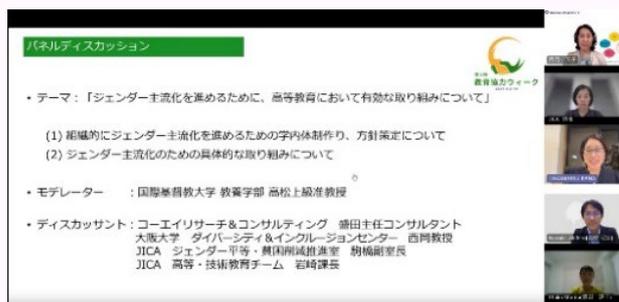
高松 香奈 (国際基督教大学 教養学部 上級准教授、国際教育交流主任)

西岡 英子 (大阪大学 ダイバーシティ&インクルージョンセンター 副センター長、教授)

盛田 詩子 (株式会社コーエイリサーチ&コンサルティング 主任コンサルタント)

駒橋 梨絵 (JICA ガバナンス・平和構築部 ジェンダー平等・貧困削減推進室 副室長)

岩崎 昭宏 (JICA 人間開発部 高等・技術教育チーム 課長)



パネルディスカッションの様子



本セッションでは、JICA がこれまでにモザンビーク、パプアニューギニア、バングラデシュで行ってきた初等理数科教育協力案件の事例を踏まえながら、子どもの学びにつながる教科書や授業のあり方について議論されました。3つの事例ともに、紙面構成の工夫を通して児童の自ら考える姿勢を促進していることが特徴的でした。また、科学的思考力・課題解決能力を養う実験の有用性が改めて確認され、実験の手順を分かりやすく示す教科書デザインについても紹介がありました。さらに、実験や観察に必要な材料や環境の整備が困難である教育現場の課題に対して、実験前後の図や写真を掲載するなどの解決策についても議論がなされ、途上国ならではの学びの難しさを改めて実感しました。今後も本テーマについての議論や実証を積み重ねることと同時に、現場の先生自身が授業や教科書のあり方を考えられるようになるための議論も深めていくことの重要性を感じました。

<登壇者>

竹本 大起 (株式会社コーエイリサーチ&コンサルティング コンサルタント)

来島 孝太郎 (アイ・シー・ネット株式会社 コンサルタント)

持佛 賢一 (株式会社パデコ シニアコンサルタント)

又地 淳 (JICA 国際協力専門員)

中尾 知美 (株式会社パデコ コンサルタント)



登壇者の発表の様子



パネルディスカッションの様子

人間開発部 基礎教育グループ インターン 田中 颯瑛



本セッションは、教育課題が高度化、多角化する途上国のニーズに応えるため、民間企業からの経験共有、個別相談・情報交換・ネットワーキングを通じて、様々なステークホルダーがノウハウや経験を共有し、国際教育協力における新たな共創のきっかけづくりを目指し開催され、34名の方にご参加頂きました。

JICA 教育・民間連携事業の紹介、文部科学省「日本型教育の海外展開 (EDU-Port ニッポン)」事業の紹介に続き、ヤマハ株式会社、学校図書株式会社より、国際教育協りに民間企業が参加する意義、JICA 技術協力プロジェクトへの参加が様々な形の教育協りに発展した事例、JICA 民間連携事業、EDU-Port 等のスキーム活用のメリットなどについてご紹介いただきました。

ヤマハ株式会社は、公教育における音楽と楽器を使った活動の普及を目指した「スクールプロジェクト」の展開において相手国政

府関係者と対等な立場で交渉でき、企業としても SDGs 推進や ESG 投資などの「非財務目標」として活用できる、などのメリットを挙げました。学校図書株式会社からは、パプアニューギニアにおいて、複数の公募事業を活用することで小学校全学年の算数・理科教科書の開発、教師用電子指導書の開発、算数ワークブックの普及を目指していると取組を紹介しました。

個別相談会・名刺交換会では、インクルーシブ教育においては、関係各国が ICT の利活用、障害者に配慮した施設設備、視覚／聴覚特別支援学校での指導法、特別支援学校教員の養成等に高い関心を持っていることが共有されました。また、教育の質の向上・教員の負担軽減においては、デジタル教材の果たす役割がある一方で、各国のインフラ整備に課題があり展開の難しさについて等意見交換がなされました。その後の懇親会でも、熱く語り合う場面が見られました。このセッションをきっかけに、様々なステークホルダー間での共創を通じた教育課題の解決事業の実現につながればと考えます。

#### <登壇者>

松山 剛士 (JICA 人間開発部 次長/基礎教育グループ長)

庄司 正人 (文部科学省 大臣官房国際課 国際協力企画室 協力官)

白鳥 亮 (ヤマハ株式会社 楽器・音響営業本部 AP 営業統括部 音楽普及グループ)

駒沢 進 (学校図書株式会社 編修部)



ヤマハ株式会社の発表



学校図書株式会社の発表



会場の様子

EDU-Port ニッポン事務局／株式会社コーエイリサーチ&コンサルティング  
永井 章平

## 教育協力ウィーク

## 「教育×無償資金協力」の未来

本セッションでは、教育分野における無償資金協力の事例紹介を通じて、障害者や防災、環境に配慮したユニバーサルデザインといった付加価値を有した施設の整備や、整備した施設・機材の中長期的な有効活用・維持の方策、技術協力との連携の取組などが提示されました。パネルディスカッションでは、無償資金協力を通じた教育協力の意義や成果に加え、「日本らしさ」と「パートナーシ

ップ」をキーワードとして、今後の展望についても議論されました。技術協力プロジェクトや NGO など他機関との情報共有、セミナーやパンフレット作成等を通じて維持管理のノウハウや建物・機材の活用方法を周知することの重要性が強調されました。

無償資金協力においても、国内外の様々なアクターと連携することで、多様な教育課題の解決や支援ニーズに応えていくことに繋がると感じました。先方政府や国際社会からのニーズに寄り添った重層的な無償資金協力の可能性を改めて考える機会となりました。

#### <登壇者>

- 西矢 尚人（株式会社マツダコンサルタンツ アドバイザー（案件実施時 設計部部長））  
杉浦 晃（株式会社毛利建築設計事務所 常務執行役員 社会開発プロジェクト室長）  
玉木 智宏（インテムコンサルティング株式会社 計画調査部 部長）  
津本 正芳（株式会社山下設計 執行役員 国際事業部門 部門長（一級建築士））  
岡本 亮治（インテムコンサルティング株式会社 計画調査部 参事）  
小荒井 理恵（教育協力 NGO ネットワーク（JNNE） 事務局次長）  
田村 智照（株式会社内田洋行 IRD 学びのコンテンツ&プロダクト企画部 学びのコンテンツ課）  
徳田 由美（JICA 資金協力業務部 実施監理第二課 課長）  
平山 修一（JICA 資金協力業務部 国際協力専門員）  
額田 聖菜（JICA 資金協力業務部 実施監理第二課 調査役）



配信会場の様子



パネルディスカッションの様子

人間開発部 基礎教育グループ インターン 田中 颯瑛

## 教育協力ウィーク

## 教育協力の障害主流化の今後に向けて ー日本の学校現場を踏まえた実践ー

「誰ひとり取り残さない」教育実現のために、これまで JICA は障害児のインクルーシブ教育を推進してきました。今後はすべての教育案件に障害者包摂の視点を組み込む「障害主流化」に取り組む予定です。

本セッションでは、国内外でインクルーシブ教育推進のために活動されている方々を招き、その知見を交え、教育協力の障害主流化の今後の展望について討論しました。インクルーシブ教育を実施していく側での共通の認識・ビジョンを作っていく重要性、そして、子どもたちは障害を持っていても、そうでなくても、等しく学習の支援を必要としている存在であるという前提が強調されました。なんのために学校があるのか、誰のための支援なのか、といった重要な問いかけが共有され、制度の抜本的な改革が難しい中で、できることを進めていくこと、今あるものをインクルーシブな視点で捉えなおすことの積み重ねが障害主流化を進めていくことだと思いました。

#### <登壇者>

野口 晃菜（一般社団法人 UNIVA 理事）  
園田 知子（認定 NPO 法人難民を 助ける会（AAR Japan））  
田丸 敬一朗（認定 NPO 法人難民を助ける会（AAR Japan））  
松本 ふみ（公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ ジャパン）  
鈴木 サヤカ（（株）コーエイリサーチ&コンサルティング）



「JICA が実施した「モンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト」では、障害児も通常学級で学べる仕組みづくりに取り組みました

**質問①**

インクルーシブ教育を推進していくには、学校、行政、住民を含む地域全体で継続的に協働し、当事者の声を反映しながら現状を改善していくことが必要だと考えます。

今あるリソースを活かして工夫し、それぞれの取り組みが誰も取りこぼさないものになるよう試行錯誤していく体制を作っていく上で大事な点、気を付けるべき点などはあるでしょうか。

多方面でご活躍いただく皆様を交え対談セッションを設けました

人間開発部 基礎教育第一チーム インターン 筑本 普



教育協カウィーク

「日本と世界のこどもたちが、つながり、共創する未来」

#### 【日本も世界も】

「もし、日本を含む世界中のこどもたちが、つながり互いを思い遣り、共に未来を考えることができれば世界はどう変わるだろうか？」

このセッションは、この問いをテーマに、100 人超の参加者（事前登録は約 300 人）を得て考える機会となりました。

#### 【こどもも大人も】

このセッションでは、10 歳から 65 歳まで多世代が登場し、世代を超えて、国際協力実務、自治体（横浜市）、若者たち（日本およびバングラデシュ）などそれぞれの目線から、つながることを通じた未来共創のあり方を話し合いました。

#### 【次の一步へつなげるアクション】

登壇者たちの率直な議論を受けて、高校生や大学生を含むフロアからは、「私もこれからは臆することなく発信したい」、「つながりをスケールアップするには？」などの意見も出されました。小さなイベントでしたが、日本と世界（途上国）を分けて考えない、新しいかたちの国際協力を模索する機会のひとつになったかもしれません。

#### <登壇者>

山際 貴慈（三鷹市内小学校 5 年生）  
藤本 真綾（横浜市内の高校 1 年生）  
板谷 明香凛（東京都内の高校 3 年生）  
筑波 結花（アメリカの大学 1 年生）  
前田 惇超（横浜市国際局政策総務課 職員）  
畔上 智洋（JICA 地球ひろば 課長）  
松山 剛士（JICA 人間開発部 次長/基礎教育グループ長）

庄子 明大 (JICA 長期 (専門家) チーフアドバイザー/特定非営利活動法人 Forum2050 副代表 (元 JICA 協力隊員))

戸田 隆夫 (特定非営利活動法人 Forum2050 代表 (元 JICA 上級審議役))

植嶋 卓己 (特定非営利活動法人 Forum2050 監事 (元 JICA 理事) /民間会社 役員)



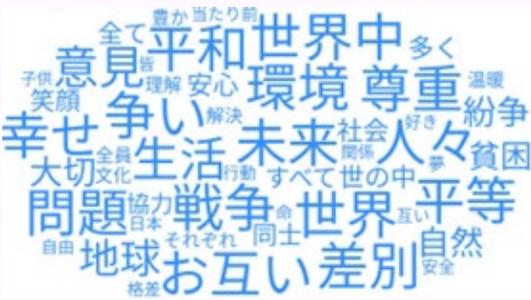
全体を仕切った MC の藤本さん (高 1)



パネリストの山際さん (小 5)



パネリストの板谷さん (高 3)



未来共創に向けて 2600 人の中高生の声



オンサイトの参加者とともに

特定非営利活動法人 Forum2050 代表 戸田 隆夫

## 教育協カウィーク

## 難民・避難民の背景を持つ人々と共に ～シリア・アフガニスタン留学事業等から見る現状～

本セッションでは、日本における難民・避難民の背景を持つ人々に対する高等教育支援を踏まえ、実際の当事者からはご自身の経験と今のお考えを、企業・支援者からは現状の取り組みや思いを語っていただきました。登壇者のコメントを一部紹介します。

- 日本を選んだ一番の理由は、頑張ったことが結果につながる国であると思ったから。(マダネさん)
- 夢は、アフガニスタン人が飛行機を「避難」ではなく「旅行」のために使えるような国にすること。(ラサさん)
- JISR は私の人生を完璧に変えた。日本は自分を尊重してくれる「家」のような居場所。(アナスさん)
- 一緒に働くことで「難民」というテーマに意識が向き、見聞きする情報が身近になり、何かできることがないかと考えるようになった。(丹羽様)

本機会を通じて、社会の中で難民・避難民の背景を持つ人々への関心が高まるとともに、共存・共創に向けた意識の醸成につながればと思います。

### <登壇者>

折居 徳正 (一般財団法人 Pathways Japan 代表理事)

丹羽 雅彦 (アクセンチュア株式会社 (JISR 元研修員アナス氏の上司))

アナス・ヒジャゼイ／Anas Hijazi（JISR 元研修員）

ラサ・ナジブラ／RASA Najibullah（PEACE 元研修員）

アブダッラ・マダネ／Abdullah Madani（Pathways Japan 受け入れ留学生）

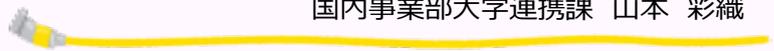


パネルディスカッションの様子



登壇者と運営メンバー

国内事業部大学連携課 山本 彩織



## 教育協カウィーク

## JICA 算数 KMN プレゼンツ テストの開発の第一人者に迫る：テスト理論の概要と活用 ～JICA 算数学習到達度評価（J-MAGPA）の実践を通して～

### 【セッション概要】

本セッションでは、JICA 算数 KMN<sup>1</sup>で作成した JICA 算数学習到達度評価（J-MAGPA）を紹介し、「テスト理論の概要と実践」について、第一人者であるベネッセ教育総合研究所の加藤健太郎様にご講義いただきました。

J-MAGPA は、世界共通のフレームワークとして作られた GPF<sup>2</sup>に基づき、JICA が作成した初等学年向けのテストです。SDG ゴール 4 の達成に向けた貢献として、教育協力の成果を統一した尺度で測り、分かりやすく可視化することを目的としています。テストはその実施目的や用途を踏まえて、信頼性・妥当性を考慮して作成する必要があり、加藤様のご講義では、J-MAGPA の実践も踏まえそれら重要な点をご説明いただきました。

### 【今後への示唆・学び】

当日は実務者からの具体的な質問も寄せられ、テスト理論に関する貴重な学びの場となりました。加藤様に分析いただいた結果は J-MAGPA 改訂に役立て、より質の高いテストにしていきたいと考えています。参加者の皆さまがご講義から何かヒントを得るとともに、J-MAGPA の活用を検討いただく機会となっていることを願います。

### <登壇者>

加藤 健太郎（ベネッセ教育総合研究所 測定技術研究室 室長／主席研究員）

山上 莉奈（人間開発部基礎教育グループ 基礎教育第 1 チーム ジュニア専門員）

村田 良太（人間開発部基礎教育グループ 基礎教育第 2 チーム ジュニア専門員）

鈴木 萌（人間開発部基礎教育グループ 基礎教育第 1 チーム 専門嘱託）

<sup>1</sup> ナレッジを恒常的に蓄積し、組織横断的に共有・活用することで、より質の高い効率的な事業を実施する体制を構築するための事業関係者間ネットワーク。

<sup>2</sup> Global Proficiency Framework。リーディングと数学の 1 年生から 9 年生までの各学年終了時に学習者が示すことが期待される最低限の習熟度（2018 年 10 月より開始）。[Global Proficiency Framework: Reading and Mathematics | Education Links \(edu-links.org\)](https://edu-links.org/)



登壇いただいた加藤様（中央右）と  
企画メンバー（JICA 算数 KMN より、左から村田さん、山上、鈴木さん）

人間開発部 基礎教育第一チーム 山上 莉奈

## 教育協力ウィーク

## 危機下の教育支援のためにどのようなアドボカシー活動を進めるべきか ～ロヒンギャ難民キャンプの教育を事例に～

昨今、世界的に人道危機が長期化し、多くの子どもや若者が教育を受ける権利を奪われています。教育支援のニーズも高まっている一方で、危機下の教育支援を継続することは容易ではありません。本セッションでは、ロヒンギャ難民キャンプ及びそのホスト・コミュニティへの教育支援を事例に、長引く人道危機において、紛争下の子どもたちの学びが継続・推進されるためには、どのような政策上の枠組みが必要かについて議論しました。登壇者からは、人道支援において教育支援が後回しにされている現状や、ロヒンギャ難民キャンプの事例では、難民の家庭で話されている言語とは異なるビルマ語の教材しか使用が許可されていないこと等、カリキュラムや修了証に関わる課題も提起されました。そして、アドボカシーを通じた政府や行政へのはたらきかけが重要であること、その活動を支持する市民の声やマルチセクターによる協働が必要であるということが改めて強調されました。

### <登壇者>

Eddie Dutton (Education Cannot Wait (ECW : 教育を後回しにはできない基金) Emergency Manager, Education)

平木 大作 (参議院議員 復興副大臣ほか)

三宅 隆史 (教育協力 NGO ネットワーク (JNNE) 事務局長)

田部井 梢 (セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 海外事業部 バングラデシュ駐在員)

大野 容子 ( (公社) セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン アドボカシー部 ガバメント・リレーションズ 兼グローバル政策提言ヘッド)



パネルディスカッションの様子。(左上から時計回りに) 大野様、  
田部井様、三宅様、Dutton 様



平木大作参議院議員からのビデオメッセージ

人間開発部 基礎教育第一チーム インターン 筑本 普



非認知能力への関心が高まり、教育協力においても就学前教育へ注目が集まっています。本セッションでは、ECD において重要なアクターである保護者の役割と位置づけについて、母子保健、栄養、そして教育という異なるセクターから検討し、セクターを超えた連携の可能性を模索しました。

家庭でのケアの実践や遊びを通じた学びの提供など、保護者は ECD の当事者であるという認識が強調され、ガーナやモザンビークでの母子手帳を通じた啓発活動が紹介されました。また、ヘルスワーカーやコミュニティの役割にも注目し、保護者だけでなく、社会で子どもを育てるという認識が共有されました。セクターによって保護者の役割は異なれども、子どもの「健全な成長」という目標は共通であり、保護者と子どもの包括的なニーズに応えていくための連携アイデアとして、保健所で実施されている両親学級を保育園・幼稚園でも導入するなどの可能性についても検討されました。

<登壇者>

神谷 哲郎 (エジプト就学前教育・保育の質向上プロジェクト (技術協カプロジェクト) チーフアドバイザー)

天池 なほみ (モザンビーク母子栄養サービス強化プロジェクト (技術協カプロジェクト) 母子保健専門家)

萩原 明子 (JICA 国際協カ専門員 (保健・医療分野))



セクターを超えた意見交換がなされました。



母子手帳を活用した事例について紹介がありました。



人間開発部 基礎教育第一チーム インターン 筑本 普



【本セッション概要】

本セッションでは、シンガポール唯一の学士レベルで教員養成を行う機関である国立教育学院(National Institute of Education: NIE)より、Choy Ban Heng 准教授と、現在客員研究員として NIE にいらっしゃる鳴門教育大学の石坂広樹教授にご登壇いただき、「シンガポール算数数学のカリキュラムの概要」及び「日本とシンガポールにおける算数数学教育の類似点と相違点」を中心にお話頂きました。

シンガポール算数の特徴として、メタ認知・問題解決課程・概念・技能・態度の 5 観点を重視したカリキュラムとなっていること、思考力の育成及び思考過程そのものをメタ認知することが挙げられました。また、シンガポールと日本の算数数学教育は、カリキュラムでカバーしている単元の内容や学習の進め方、具体的な説明から抽象的な理解に繋げるところなど、非常に多くの類似点があることを

学ぶことができました。他方、日本の算数数学教育との相違点として、ICTの積極的活用や、より直接的な指導法が主流であることも確認できました。

#### 【今後への示唆・学び】

今後の算数教育協力において、日本とシンガポールの両国の特徴を理解することは、途上国それぞれに合ったオーダーメイドの支援の幅が更に広がることに繋がると思います。今回の繋がりをきっかけに、引き続きシンガポールの算数数学教育の関係者との交流を続け、よりよい算数教育協力の可能性を検討していきたいと思えます。

#### <登壇者>

Dr. Choy Ban Heng (Assistant Professor, National Institute of Education(NIE), Nanyang Technological University (NTU))

Mr. Hiroki Ishizaka (Professor, Naruto University of Education, Visiting scholar of NIE)

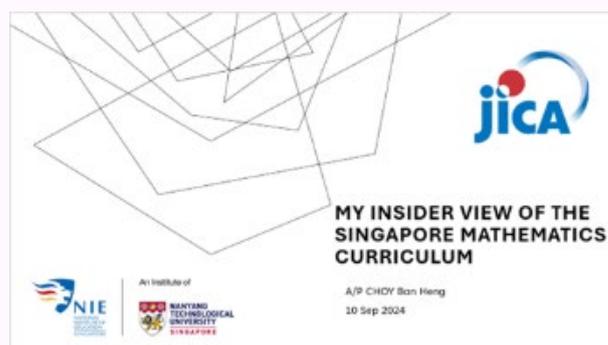
Mr. Ryota Murata (Associate Expert in education, JICA Basic Education Team2, Basic Education Group, Human Development Department, JICA)

Ms. Fuka Oshima (Country Officer, JICA Africa Department, Division 3, JICA)

Mr. Yuho Hashimoto (Deputy Director, JICA Basic Education Team1, Basic Education Group, Human Development Department, JICA)



上段左より、JICA 村田、橋本、鳴門教育大学 石坂教授、  
下段左より、大島、国立教育学院 Choy 准教授



国立教育学院 Choy 准教授の発表スライドの表紙

人間開発部 基礎教育第二チーム 村田 良太

## 教育協カウィーク

## 途上国留学 PR・経験者体験談セッション 「世界に向けた、 「わたし」の第一歩 —途上国留学から広がる未来への可能性—

本セッションでは、途上国への留学経験のある4名（スズキ株式会社植月氏、国際環境 NGO 佐藤氏、JICA 休場氏、日越大学吉田氏）とモデレーターとしてトビタテ！留学ジャパン事務局の荒畦氏をお迎えし、それぞれのご経験をもとに途上国へ留学することの魅力や強みについて議論を行いました。各登壇者それぞれの立場から途上国留学への想いや経験を語っていただき、異なるキャリアで活躍しつつ、現在まで途上国留学の経験が活かしていることが伝わり、非常に活気あふれるセッションとなりました。

今後の示唆や学びは以下のとおりです。

- 途上国への留学を通じて、世界が抱えるさまざまな課題に対峙し、身近なものとして経験することで見える世界や範囲が広がる。
- 国際協力に関心がある場合は、現地で国際協力を実施するあらゆる組織（NGO、国連機関、政府系機関、民間企業等）

の役割や関わり方を知ることができ、自身がどのような立場から国際協力に携わりたいかを考えることができる。

JICA では、留学や共同教育・共同研究を通して日本と海外の大学・研究機関・企業の組織や人が交流しあうことで、新たなネットワークが生まれる「国際頭脳循環」を促進しており、今回を機に途上国留学に関心を持つ方が増えることも期待されます。

#### <登壇者>

荒畦 悟（文部科学省トビタテ！留学 JAPAN 事務局 プロジェクトディレクター）

休場 優希（JICA 管理部 職員）

植月 悠記（スズキ株式会社 次世代技術開発部 次世代技術企画課）

佐藤 果穂子（国際環境 NGO 広報）

吉田 洋能（日越大学学部日本学プログラム 講師）



活気あふれるパネルディスカッションの様子



4名の登壇者（左から荒畦氏、休場氏、植月氏、佐藤氏）と  
企画メンバー（荒井、笹川）

人間開発部 高等教育・社会保障グループ 荒井 梨菜、笹川 千晶

## 教育協カウィーク

### JICA 算数 KMN プレゼンツ JICA がどうして算数アプリ？

～途上国の四則計算力向上を目指して～

JICA 算数 KMN では、JICA の既存の紙媒体の算数教材を元として、タブレット等で学習できるアプリケーションを開発しています。この「算数アプリ（Jical）」はオフラインでも利用可能で、必ずしも十分なオンライン環境が整っていない途上国でも自主学習できる設計になっています。SDG4「質の高い教育をみんなに」の実現のため、「算数アプリ」活用による子どもたちの基礎計算力の定着の支援を目指します。

本セッションでは、アプリ開発の背景や目的を説明した上で、実際のタブレット画面で内容を紹介しながら、参加者の皆様にもご自身でアプリを体験していただきました。

今後、途上国の現場で「算数アプリ」の活用による子どもの学びの成果を確かめると共に、こうした実践は民間企業が途上国の教育における ICT 活用支援に参加する呼び水にもなり得ます。

途上国で ICT 活用の重要性が高まる中、子どもの学びの改善に資する ICT の在り方を、今後も考えていきたいと思ひます。

#### <登壇者>

田口 晋平（JICA 人間開発部基礎教育グループ 基礎教育第 1 チーム 課長）

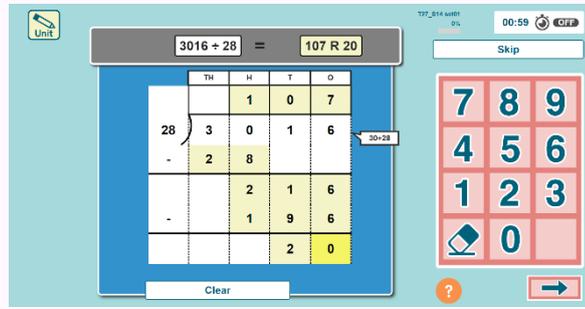
村田 良太（JICA 人間開発部基礎教育グループ 基礎教育第 2 チーム ジュニア専門員）

大野 岳夫（ヘルスアンドテック合同会社 CEO）

鈴木 萌（JICA 人間開発部基礎教育グループ 基礎教育第 1 チーム 専門嘱託）



算数アプリ「Jical」トップ画面



数アプリ「Jical」割り算のひっ算の画面

人間開発部 基礎教育第一チーム 鈴木 萌

## 教育協カウィーク

## 海外から学ぶこれからの教育 2024 年度 教師海外研修 教育行政コース報告会

### ●教師海外研修とは？

日本の教育関係者が 7～10 日間ほど海外を訪問する JICA の提供するプログラムです。2024 年度の教育行政コースでは、全国の学校管理職および指導主事 10 名がパプアニューギニアを訪問し、その学びを日本の教育現場で活かすことを考えました。

### ●PNG（パプアニューギニア）で学んだことを日本の教育現場で活かすには？

参加者からは、以下の問いや気づきが挙げられました。

- ・恵まれているとはいえ教育環境でも、英語でしっかりコミュニケーションをとり、目を輝かせて意欲的に学ぶ子どもたち。日本でその姿を目指すにはどうすればよいのだろうか？
- ・日本国内でも増えている外国につながる児童生徒。お互いの文化を尊重し理解する PNG の「ワントク」文化、共通点を知り違いから学ぶ姿勢が互いの理解や尊重につながるのでは？
- ・PNG の関係者の教育への思いは私たちと変わらない、子どもたちの学びたいという願いも同じ。それを肌で感じる事が、互いが近づく第一歩。

### <登壇者>

※教師海外研修参加者 10 名

齊藤 辰彦（茨城県立伊奈高等学校 校長）

武井 知子（茨城県教育研修センター 指導主事）

小泉 学（埼玉県立伊奈学園中学校 校長）

白井 里佳子（埼玉県立総合教育センター 主任指導主事）

上原 修一（新潟市立総合教育センター 指導主事（副参事））

栗根 幸子（愛川町立田代小学校 教頭）

藤元 貴嗣（神奈川県立愛川高等学校 校長）

上田 大樹（白山市教育委員会 学校指導課 指導主事）

北野 真理（堺市立若松台中学校 教頭）

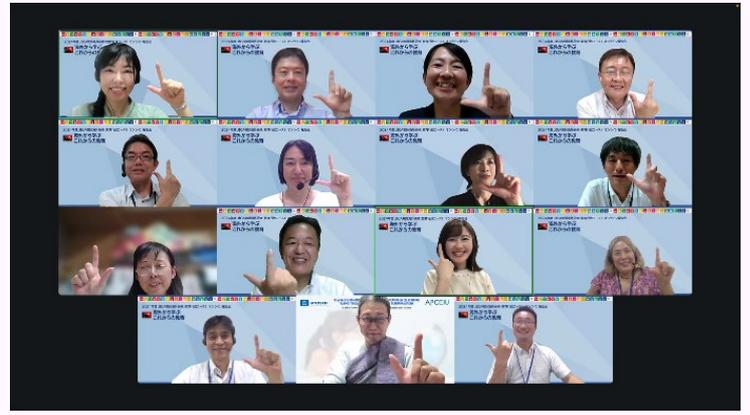
中野 晴美（神戸市立多聞東小学校 校長）

畔上 智洋（広報部地球ひろば推進課 課長）

加藤 眞佐美（広報部地球ひろば推進課）



訪問先 ソゲリ小学校



報告者全員で！JICAのJ！

広報部地球ひろば推進課 加藤 眞佐美

## 教育協カウィーク

## 外国につながる子どもと教育— 日本での実践と途上国での教育支援から学ぶ

本セッションでは、JICA 海外協力隊・専門家としてネパールで基礎教育協力に携わった山下さくら氏（株式会社パデコ）と田中研一氏（現フリーランス）が、日本で外国につながる子どもへの日本語指導と高校受験支援の経験を語りました。両氏が東京都教育庁と連携したことから、東京都教育庁の三田典子氏が加わって、日本語支援を必要とする児童生徒向けのデジタルテキスト「たのしいがっこう」や高校新入生向け日本語講座が紹介されました。

### 今後への示唆・学び

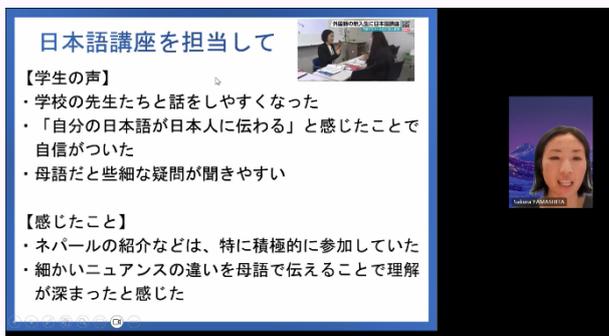
指算やジェスチャーなどの文化的要素への理解が、日本での指導においても重要であると再認識させられました。特に数学の学習では、母語を使った概念の理解が進学において力を発揮する点や、日本の教育システムに不慣れな保護者への母語支援が、子どもの進学可能性を高める可能性があることが示唆されました。学校では多忙な教員や母語の多様性が課題となり、個別対応が必要になる現状も紹介されました。また、子どもが得意とするスポーツなどの教科外活動が子どもの意欲を高め、友人や大人との関係性の質を高める鍵と指摘されました。

### 参加者の声

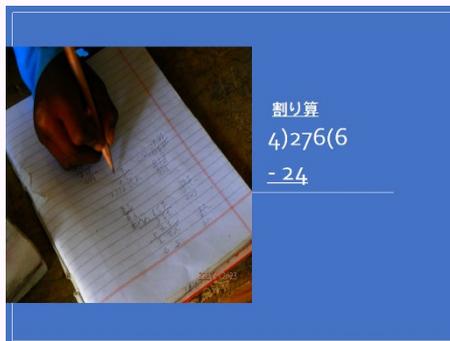
「ネパール人の教育支援に興味を湧いた」「各レベルの取り組みが参考になった」「ICTによるCLD児の支援の可能性を感じた」などの感想をいただきました。

### <登壇者>

- 三田 典子（東京都教育庁グローバル人材育成部 主任指導主事（日本語指導担当））
- 山下 さくら（株式会社パデコ 教育開発部 コンサルタント）
- 田中 研一（フリーランス）
- 高橋 香名（JICA 人間開発部 基礎教育グループ）



日本語講座講師経験を紹介する山下氏

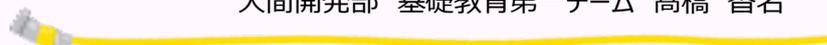


ネパール式割り算で計算する子ども



3\_ディスカッション (左上から時計回りに田中氏、高橋、三田氏、山下氏)

人間開発部 基礎教育第一チーム 高橋 香名



**教育協カウィーク**

**「誰も取り残さない教育」をどう実現するか？  
～NGO ならではの現場アプローチと広がる仕組みづくり～**

本セッションでは、JICA グローバル・アジェンダ「誰ひとり取り残さない教育の改善クラスター」の枠組みに照らしつつ、難民、障がい、児童福祉施設などの困難な状況にある子ども達に支援を届けている草の根技術協力事業の実施団体（国境なき子どもたち（KnK）、アジアの障がい者活動を支援する会（ADDP）、アクション）に事例を紹介いただき、パネルディスカッションが行われました。

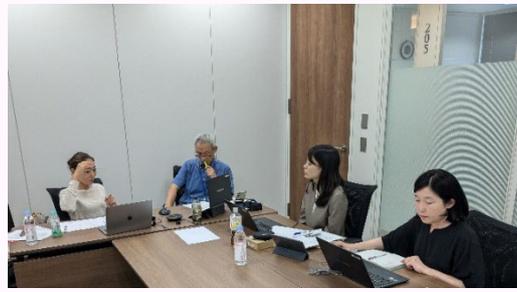
パネルディスカッションでは、「事業を行う中で、『これは活動・事業が広がりそうだ』と感じた瞬間」や「現場でのジレンマ」が話題となり、登壇者からは、「省庁や自治体が次のアクションを共に考えてくれた時」、「学校側の SNS 発信に近隣の学校から反響があった時」等の回答がありました。また、「省庁や学校のトップや担当者の交代」が共通の課題であるものの「積み上げてきたものがゼロに戻りそうな時にバトンをつなぐのも NGO の役割」との話や、「目の前の子どもたちの変化や成長過程を見ることが長年現地で活動をできる NGO の強みであり喜びである」というお話が印象的でした。参加者約 120 名からは、「現場のリアルを垣間見ることができた」といった声が寄せられました。

<登壇者>

- 松永 晴子（特定非営利活動法人 国境なき子どもたち（KnK） ヨルダン / シリア難民支援 事業総括）
- 中村 由希（特定非営利活動法人 アジアの障害者活動を支援する会（ADDP） 国際協力部 事務局長）
- 横田 宗（特定非営利活動法人 アクション 代表）
- 三宅 隆史（教育協力 NGO ネットワーク（JNNE） 事務局長）
- 田中 紳一郎（JICA 国際協力専門員（基礎教育分野））
- 小林 美弥子（JICA ラオス事務所 所長）



ディスカッションの様子。手話・文字通訳を導入（右上）



配信会場の様子

## 成長 Growth

「できること」を増やし、自信を育み、社会性も身に付けられるための就労準備トレーニングを在学中に！

教員×親×就労先×ジョブコーチが“情報共有”

インクルーシブ教育の教員やジョブコーチによるサポート



事例紹介(ADDP)：ラオスの障害をもつ子どもたちの教育から就労へのシームレスな支援



事例紹介(KnK)：ヨルダンのシリア難民を含む学校での特別活動の実践

●SPAの運営（8人雇用）



●TikTokショップの運営（3人雇用）



●整備工場の運営（40人雇用）  
\*2024年11月にオープン予定



●フィリピン料理ファストフードの運営  
\*2024年に3店舗オープン（雇用18人）



事例紹介(アクション)：フィリピンの子どもたちの社会的自立に向けた取り組み

JICA 東京センター 市民参加協力第二課 中川 春希

## 教育協カウィーク

### 教育で社会は変革できるか？

### SDG4「誰ひとり取り残さない」教育協カのマネジメントと評価

SDGs の「誰ひとり取り残さない」目標にむけて教育はどのような貢献ができるか、についていくつかの事例とともに「評価」の在り方を中心に議論しました。評価は教育協カ活動によって生じた変化の本質的な価値を引き出すことであり、それを可視化するための評価方法についても言及されました。また、現代の複雑で変化し続ける課題に対応するには、政府、市民社会、教育現場が主体的に問題解決に取り組む必要があり、評価プロセスも単なる成果測定だけでなく、PDCA サイクルのすべての側面において共創的に行うことの大切も強調されました。

加えて、フロアディスカッションでは、効果的な評価に重要な 2 点として、評価の根元が自らの課題意識やビジョンと結びついていること、評価軸を一元的にせず、現場の実情に即したデザインを考慮することが議論されました。

評価は、数値や成果だけでなく、現場の価値や長期的なビジョンを再認識させることであるなど、今後の教育協カの在り方に大きな示唆を与えるセッションとなりました。

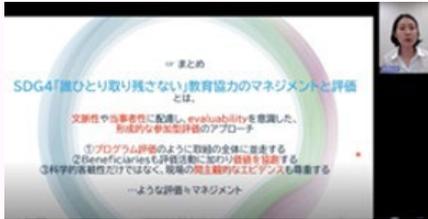
<登壇者>

米原 あき（東洋大学 教授）

大橋 知穂（JICA オルタナティブ教育推進プロジェクト（AQAL）II チーフアドバイザー）

大安 喜一（ユネスコ・アジア文化センター（ACCU） 教育協力部長）

水野 敬子（JICA 国際協力専門員）



教育協力の評価について提言する米原氏



パキスタンの事例を紹介する大橋氏



フロアの参加者と議論する登壇者

人間開発部 基礎教育グループ インターン 田中 颯瑛



経験者から学ぶ、途上国における ICT 導入の障壁とそれを乗り越える知恵と工夫

【ICT 導入の課題とは】

本セッションでは、教育現場における ICT（情報通信技術）の導入に伴う課題とその解決策について、国内外の事例を交えて議論が行われました。主な課題として、機器の不足、ネットワークの不安定さ、停電や雷によるリスク、ICT に対する理解やモチベーションの欠如、ソフトウェアの過剰導入による非効率性などが挙げられ、登壇者が自身の経験を基に事例を紹介しました。

【効果的な ICT 導入に向けて】

一方で、適切なアプローチを取ることで状況が改善した成功事例も取り上げられ、課題の特定とそれに合った解決策の提供が、ICT 導入の鍵であることが強調されました。ICT 活用には多くの障壁があるものの、それらを事前に把握し、適切な対策を講じることで効果的に活用できるという点が示されました。

最後に、課題を理由に ICT 導入をためらうのではなく、課題を理解した上で準備を進め、積極的に教育現場で ICT を活用していくことの重要性が強調されました。

<登壇者>

大島 慧（JICA 専門家 ガーナ理数科アドバイザー）

井堀 尊義（群馬県吉岡町教育委員会事務局 学校教育室室長補佐・指導主事）

シエルパ 絢子（特定非営利活動法人 e-Education カントリーマネージャー（ネパール））

杉山 竜一（株式会社パデコ 教育開発部長）

ICT教育の課題		
	導入	運用
ヒト	<ul style="list-style-type: none"> <li>ICTの導入・活用について賛成していない人がいる【#】</li> <li>トップダウンへの不満【#】</li> <li>ICT活用のスタンス（義務？任意？）や意義が不明確【#】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>欲しい人があるが、使えない（機器がない、知識がない）【#・#・#】</li> <li>教員の理解不足【#】</li> <li>IT支援教員の確保【#】</li> </ul>
ハード	<ul style="list-style-type: none"> <li>インフラ（電気・インターネット）が整備されていない【#】</li> <li>端末を購入するための予算が限定的【シ・#】</li> <li>多様な機器を導入するが利用されない【#】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>接続やネットワークのトラブル【#・#・シ】</li> <li>学費・教材費【#】</li> <li>SIMカード・スマホの盗難【#】</li> </ul>
ソフト	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業で活用できるソフトウェアがわからない【#】</li> <li>高機能ソフトが解決するというバイアス【#】</li> <li>多様なソフトを導入するが利用されない【#】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教育に不要なコンテンツ（SNSやポルノ）の混在【#】</li> <li>一斉導入したにもかかわらず使えない、お金はかり続けるのりがある【#】</li> </ul>

ヒト：授業者（教師、専任の指導者）、児童・生徒、その他関係者（ICT支援員）  
 ハード：端末、ネットワーク  
 ソフト：ソフトウェア（動画、協働学習ツール、AIドリル）

登壇者の実体験を基に課題を紹介



登壇者の様子（左から時計回りに井堀様、シエルパ様、大島様、杉山様）

人間開発部 基礎教育グループ インターン 田中 颯瑛  
 株式会社コーエイリサーチ&コンサルティング 教育部 石川 健太

## 教育協カウィーク

JNNE/ACCU/SVA 共催 国際識字デー記念イベント:

紛争・災害の影響を受けたコミュニティにおける識字・ノンフォーマル教育支援

### 【概要】

世界の非識字者(15歳以上)が7億6,300万人と多いほか、紛争、自然災害等の影響を受けている2億2,400万人の子どもが質の高い教育支援を必要としています。紛争・災害に影響を受けたコミュニティにおける緊急期～中・長期的な復興・開発における識字・ノンフォーマル教育の利点と課題、レジリエンスの向上への貢献、同分野における日本の協力促進のパートナーシップ構築について、ユネスコ、ECW、JICA、NGO（ACCU、SVA）の登壇者を招き、アフガニスタン、パレスチナ・ガザ地区、日本の東北における事例等を基に議論しました。

### 【今後への示唆・学び】

- ① 危機下で機能しづらい公的な場だけでなく自宅・地域の学習場所や地域の人材を活用した柔軟な形態の学習、ノンフォーマル教育の主流化、心理社会的支援の重要性
- ② 修了証、就労や高等教育への継続の課題
- ③ ECWのような多国間機関とのパートナーシップに必要なNGOの能力強化（教育クラスターへの効果的参加、緊急時の教育支援の最低基準の遵守）の重要性
- ④ 日本・途上国間および途上国間の学び合い（国際枠組みの参照含む）、技術協力と本邦研修の連携
- ⑤ 状況に応じたICT、ラジオ等の活用（ハイブリッド含む）、民間企業との連携可能性
- ⑥ 教育のみならず平和へのアドボカシーの重要性(人道・開発・平和のネクサス)

### 【登壇者】

ロマル・アブドゥラ（ユネスコ・カブール事務所 ナショナル・プロジェクト・オフィサー）

ナセル・ファキ（教育を後回しにはできない基金（Education Cannot Wait: ECW）戦略的パートナーシップ チーフ）

若山 洋子（ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）教育協力部主任）

松山 剛士（JICA 人間開発部次長・基礎教育グループ長）

三宅 隆史（シャンティ国際ボランティア会（SVA）教育事業アドバイザー）

小荒井 理恵（教育協力NGOネットワーク（JNNE）事務局次長）



パネルディスカッションの様子



日本の資金援助によるアフガニスタンにおける識字キャンペーンの看板

教育協力 NGO ネットワーク(JNNE) 小荒井 理恵

## 教育協力ウィーク

## 教育協力キャリアセミナー

### 【概要】

教育協力キャリアセミナーでは、現在、教育協力業界で活躍をされている方々をお招きし、将来教育協力の道に進みたい学生や若手社会人を対象に、各登壇者のこれまでのキャリアについてお話いただき、国内外の多岐にわたるパートナーと働く中で自分のこれまでの認識や世界観が広がる醍醐味や大変さを熱く語っていただきました。

### 【参加者の声】

「様々な関わり方があることを知り、自分の強みをこれからどう活かしていくかを考えるフックをもらった」「社会が求めているものを身につけていくことも大事な一方、自分の興味駆動で行動し、社会にチューニングしていくことも重要とのメッセージに勇気をもらった」との感想が寄せられました。

### <登壇者>

水野谷 優 (ユネスコ国際教育計画研究所(IIEP) 技術協力部 部長)

澤柳 孝浩 (公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン アドボカシーオフィサー)

赤坂 有紀 (JICA「オルタナティブ教育推進プロジェクトフェーズ2」専門家 (業務調整／ノンフォーマル教育))

中尾 知美 (株式会社パデコ コンサルタント)

渡邊 紗良 (JICA 人間開発部 基礎教育グループ)



登壇者一同 (右上より時計回り)

中尾氏、赤坂氏、水野谷氏、

澤柳氏、渡邊

人間開発部 基礎教育グループ 渡邊 紗良、高橋 香名



最終日のクローヅィングセッションでは、教育協カウィークの総括として「セッションのテーマの多様化」「包括的な議論」「複数のセッションで若者がキーワードの一つとなった」「世代間を超えてアイデアや知見が共有され、多くの共創の芽が生まれた」とのコメントがあり、広島大学の吉田教授から、「教育協カプラットフォームを軸として、日本の教育協カの強みや活動を国内外に広くアピールすることが必要」との言葉で締めくくられました。

<登壇者>

澤柳 孝浩（公益財団法人プラン・インターナショナル・ヅァパン アドボカシーオフィサー／教育協カ NGO ネットワーク（JNNE）運営委員）

杉山 竜一（株式会社パデコ 教育開発部長）

岩崎 理恵（JICA 人間開発部 基礎教育グループ 基礎教育第二チーム 課長）

岩崎 昭宏（JICA 人間開発部 高等教育・社会保障グループ 高等・技術教育チーム 課長）

吉田 和浩（広島大学 IDEC 国際連携機構 教育開発国際協カ研究センター長・教授）



クローヅィングセッション終了後、オンサイトで参加された企画者の皆様と

人間開発部 基礎教育第一チーム 深澤 智子



### 【編集後記】

今年の教育協力ウィークは、過去最多の 28 セッションを過去最長の 2 週間に渡り開催しましたが、延べ 6,941 名の方に登録いただきました。参加頂いた皆様、企画・登壇頂いた皆様に感謝申し上げます。

これまでの多様な教育協力の成果を確認できたほか、複合危機下の課題に対する教育の役割、国際教育協力と日本国内とのつながりの重要性等、多岐に渡るテーマで多くの学びを得る機会となったこと、より大きな成果を生むためにそれぞれの強みを生かした共創が重要と改めて認識する機会になったと思います。

今後は教育協力プラットフォームの目標と活動を戦略的に推進していきたいと思っています。教育協力へのご支援を引き続きお願いします。



人間開発部基礎教育グループ長 松山 剛士

### 「教育ナレッジマネジメントネットワーク (KMN)」とは

JICA 教育ナレッジマネジメントネットワーク(KMN)は、JICA の教育協力事業の質向上を目標に、JICA の教育協力に関する知見や経験を一元的に蓄積し、事業に活かすとともに対外的に発信するために、人間開発部を中心に活動を行っています。具体的には、①戦略（事業戦略、ドナー連携等）、②ナレッジの創造（プロジェクト研究、インパクト評価等）、③ナレッジの共有（民間・大学とのネットワーキング）、④広報（ナレッジの蓄積・発信）等の活動を実施しています。「教育だより」では、こうした教育 KMN の取組のほか、教育協力に関わる国際的な動向や実施中の案件情報等をあわせてお伝えしていきます。教育 KMN および JICA 基礎教育、高等・技術教育、社会保障グループからの各種お知らせを希望の方は、

(1) 名前、(2)ふりがな、(3)所属、(4)役職、(5)職業、(6)E メールアドレスを明記のうえ、kadaishien-ningen@jica.go.jp までお送りください。